

論文

戦前昭和期の教師観と学校問題

——小学校教員に関する事件報道を通じて——

作 田 誠一郎

〔抄 録〕

本稿は、戦前昭和期の教師観および学校問題を明らかにするために教師の事件という逸脱領域に着目して分析を試みた。当時の小学校教師は、急速な社会環境の変化によって経済的にも精神的にも厳しい状況下におかれていた。特に聖職者としての教師像は、行き過ぎた指導から生じる学校問題や教師の犯罪が起ること、保護者やマス・メディアの批判を受けて大きく揺らいでいた。結果として、事件報道における教師自身の個人情報の発信やこれまでの訓導とは異なる代用教員という教師像、教育界の腐敗問題、そして戦時期の「国家の教師」像など、さまざまな教師観が重層化していたことが明らかになった。

キーワード：学校事件、教師観、事件報道

1. はじめに

近年、体罰事件やいじめ事件などにおいて教師の責任とともに閉鎖的な学校空間という環境そのものに社会が注目し始めている。開かれた学校として家庭や地域社会と連携し協力する学校が推し進められ、学校の情報公開や学校評価の実施など新たな取り組みがおこなわれて久しい。特に学校に所属する教師は、学級経営とともに地域社会や保護者とのより一層の関わりが重視され、教師に対する社会からの眼差しは増しているように思われる。また働き方改革が進められるなかで教師の残業などの労働環境が報道され、これまでとは異なる教師の一面が世間に周知されつつある。

ところで本論で対象とする戦前期の教師のイメージは、今日の教師とは異なり一般的に権威的で絶対的な内容が思い浮かぶ。柳（2005）は、義務教育制度の全国的組織網の形成以降、学校の存在や教師という職業、時間割に沿った行動規範等、学校の存在が絶対化し学校像は規

範化されて、人びとの意識を支配してしまうと指摘する。日本において明治期以降の近代教育制度の導入以降、学校という存在、そして教師や児童生徒という存在は人びとの意識に広く定着してきた。その学校社会のなかで、教師という聖職が帯びる権威が、子どもたちにとって先導的な役割を果たすこともあれば、規範を励行させ違反した者に対して罰する力（権力）として起動してきたことは周知のとおりである⁽¹⁾。一方、教師に対する歴史的な研究としては、石戸谷（1967）および石戸谷・門脇（1981）が、近代教育制度のなかで形成される学校社会や教師像、そしてさまざまな教育運動や教師の活動などを詳細に分析している。また唐澤（1955）は、教師の生活を中心に戦前、戦後直後に至るまでの長期的な考察をおこなっている。しかし、これまでこの教職に対する逸脱領域からのアプローチは殆どおこなわれていない。この逸脱領域からのアプローチは、同時に戦前期の教師の「聖職」観についても問うことになる。さらに教師に対する歴史社会学的な考察は、教師という社会的地位を支える近代的な学校制度そのものを再考することにつながるものと思われる⁽²⁾。

2. 問題の所在

本論の問題意識は、教師の事件や学校社会における事件を通じて明らかにし、当時の教師観やその指導がどのようにとらえられてきたのかについて考察することにある⁽³⁾。戦前昭和期（昭和元年から昭和20年まで）は、学校社会において大きな変容期であり、子どもたちや教師にとってもその学校生活が目まぐるしく変化した時期といえる。明治期の「学制」（1872）の発布以降、近代教育制度が展開され、大正期には尋常小学校の在校生数が倍増し、大正自由教育が進展するなど、日本の教育が充実した時期を迎えた。その後、昭和期に入ると昭和恐慌（1930～31）や太平洋戦争（1941～45）、そして終戦という政治経済の衰勢期を向かえることになる。また1931年および1934年には東北を中心として冷害による凶作に見舞われ農山村の多くが飢餓状態となり、貧農農家の子どもの身売りも社会問題化する。都市部においても昭和恐慌による失業者の増加により、母子心中や浮浪児の増加などが問題視され、その対応として「児童虐待防止法」（1933）や「母子保護法」（1937）が施行されるが、十分な対応とまでは至らなかった。

一方、学校社会に目を向けると、学制の発布以降、日本の近代的な学校教育制度の普及は、文部省を中心に進められて管理・運営されることになる。この明治初期の近代化の過渡期において、教師は教室という新たな空間のなかで一律の行動様式（号令による「起立・礼・着席」や立ったままの授業など）に当惑しつつも順応していった（小針2007:38）。このように近代学校制度は、戦前昭和期において人びとの生活に定着し、戦時期の国民学校など国政とともに変化していった。

学校に関する歴史的な研究は、これまでも教育史を中心に数多く蓄積されている。しか

し、学校内で起こった事件や事故について新聞報道から分析した研究は、戦後を対象とした研究は認められるが、戦前期まで含んだ分析はあまり進められてこなかった。教師の社会史的研究に対して広田は、共通する基本的な枠組みとして「教員の日常生活・社会的地位や社会的性格を政策－日常意識というマクロ・ミクロの多層の次元に位置づけながら、社会状況や出身階層の変化と関わらせていくという、いわば教員を取り巻く全体像を再構成するという方向で研究が導かれてきた」(広田 1990: 77)と言及している。そして、教員史の課題として、社会変動が教師像や教師社会の変化を引き起こしてきた過程についての分析は進んでいるが、教師が地域社会等にどのような影響をおよぼしたのかという領域の研究は進んでいないという。つまり、問題の関心が現代教師のあり方から出発しているため教師が近代化の過程によって説明されるべき従属変数となっていることから、教師を手掛かりとした明治期以降の社会の変化の考察という視点が必要であると指摘する。そして、教師に関わる諸要因の構造が日本に特有の現象であるかに関しては、近代化の過程における教員の比較社会史について追及する必要があると言及している。

本論においては、教師自身の事件や学校問題が社会に与えたと思われる影響および学校問題に関する教師の対応について新聞報道を通じて考察することで、社会的性格ともいえる当時の教師観やその指導について逸脱領域という新たな視点から分析を試みたい。したがって、本論では新聞報道を中心として戦前昭和期の学校事件および教師の事件を整理し、そこに展開される学校や教師、教師の児童生徒に対する言説を分析する。人びとの学校に対するイメージが固定化しイデオロギーとしての学校中心主義が浸透するなかで、聖職という理想的な教師像や權威というバールに覆われてきた教師が、事件をきっかけに一個人として社会にあらわになる状況に注目しながら当時の教師観やその特徴について考察する。

3. 戦前昭和期の学校社会と教師の權威

大正期から昭和期に変わり、1930年代は大正自由教育の経験を引き継ぎ、生活綴方運動やプロレタリア教育運動等の日本の民間教育運動が展開された(片桐・木村 2008: 135)。一方、満洲事変(1931)を契機に日中戦争(1931)から終戦(1945)を迎えるまでの期間(総力戦体制期)においては、総力戦として国民は「皇国民」として国家の統制・管理を受けることになる。このような国家総動員体制下の学校教育は、「国民学校令」(1941)の施行により小学校を国民学校と改称し、初等科6ヶ年および高等科2ヶ年の計8年間の義務教育期間として再編成された。そして教師と児童生徒の関係についても、国民学校の教師の役割は、「国家の教師」として小国民を錬成することであり、天皇の名のもとに精神主義と体罰主義をもって子どもたちの指導にあたった(小針 2007: 132-137)。

教師に目を向けると、先述した昭和恐慌は教師にとってもその生活に大きな影響を与えた。

石戸谷（1967）は、昭和5年度の道府県および市町村の予算を昭和4年度当初予算の1割5分以上減らすことが指示されて教師待遇引下げが公然と唱えられることになり、町村費の半ば近くを占める教育費（特に教師の俸給や手当等）が注目され、教師減俸や未払い、教師の人員整理や学校経費削減などの傾向があらわれてきたと指摘している。

また当時の師範タイプの特徴として唐澤（1955）は、「自由性の喪失、形式主義、画一主義、型にはまった人間」をあげており、その特徴の根底には、初代文部大臣森有礼の断行した組織的な国家主義の教育や準軍隊的な師範教育があるという。そして、この森の師範教育の精神は「順良・信愛・威重」という気質に裏付けられており、それ以前（明治13年の集会条例まで）にあった自他ともに天職観や聖職観を抱いており、かつ尊敬されていた教師が、教師自身が自らを低くみるとともに、社会の教師に対する尊敬度も低くなったと考察している。軍需景気下（昭和12年頃）においても、工員の給料は上がったが、小学校教育界の増俸も極めて厳しく、若い教師の不満や人生的な悩みを感じる傾向が非常に濃厚になっていた。また同時期の学校における特徴のひとつとして、無資格教師割合の増加も注視する必要がある。田中（1979）によれば、これは戦局の激化および長期化によって男性教師が出兵したことによる教師不足を補うための代用教師の増加であり、昭和20年には教師4人のうち1人は無資格教師であり、教育の質的低下をもたらすことになったという。

当時の教師に対する見解として、生徒の就職先である当時工場長であった大塚は、「学校教師は学校教師として、その生徒を善導し、さうして親兄弟先輩としてこれを破壊してゐる場合が多いのです。居室では『順々に』と教へながら、歸りには我れ先に電車に乗るのです。（中略）結局教師の言ふことは、言ふことであつて實行しなくとも宜いと言ふことを傳へるやうなもの即ち親兄弟先輩のやつてゐることが宜いのだ、先生の言ふことなんか本氣にしておたら大變なことになるといふことを教へるやうなことになつて仕舞ひます」（大塚1939:7）と戦時期における教師の言動を批判している。さらに奈良女子高等師範学校教授であった小川は、『現下の教育問題』（1938）において「況して往昔に於いては教師の數も少く、そして儒教の勢力が強いから、先王の學を傳へる師道は尊敬するべきものとして、教師に對しては、社会一般が之に敬意を拂つて居た。（中略）今日に於ては社會の教育觀は一變し、父兄は皆その子弟の教育を以て自己の意志に副はむことを望み、且つ教師も亦一種の職業であるとして、もはや従時の如く特別の敬意を拂はないのみか、之に對して種々の要求をするのである。そして教育普及の結果、兒童の數と共に教師の數も非常に多くなつたので、教師の人格、思想等も、それぞれ相違して一樣でないから、時に社會から種々の惡評を被むるものもあるので、自然に教育上の權威を微弱ならしめて居るのである」（小川1938:195）と評しているように、戦前昭和期の教師の權威が変化したことに言及している。

このような教師のめぐる社会環境の変化と教師の權威の衰退は、特に小学校の教師自身の経済的な状況を踏まえると精神的にも物理的にも厳しい状況下にあったことが窺われる⁽⁴⁾。ま

た、学校および教師から保護者への要望について『生活指導小学校行事の研究』(1933)の入学式の校長の挨拶をみると、「学校や校長の批難は決して子供の前でなさらぬやうに願ひます。『学校は日本一のよい学校だ、校長先生は日本一の偉い校長だ』と言つて頂きたい。そこに貴い教育が生れるのであります。(中略)第一に学校と家庭とは親類、第二に子供の前では校長や学校をはめること、この二つを御承知願つておけば、夫で今日の會合は最も教育上意義ある價值を認める事が出来ると思ひます」(入澤・山崎 1933: 21)と残されている。つまり、この保護者説明会の内容から当時の教師に対する批判が保護者から子どもたちに語られており、学校や教師が生徒指導上においても教師の權威を高めることに協力してほしいというメッセージが読み取れる。

これらの史料から戦前昭和期の教師が経済的にも物理的にも、そして聖職が帯びる權威の側面からも厳しい状況に置かれていたことがわかる。

4. 新聞報道における教師の事件報道

本論において対象とした新聞報道は『読売新聞』とし、対象期間は1926年12月25日から1945年8月15日までとした⁽⁵⁾。また検索に関しては、「ヨミダス歴史館」を用いたが、事件の内容によっては検索ワードで該当しない記事もあるために手引きによって再度確認した。その結果、教師の事件報道に関する対象記事は1,369件であった⁽⁶⁾。また本論では、個別の事件報道に関して『朝日新聞』の記事も対象としている。

(1) 教師の素行と風紀問題

学校事件を研究した弁護士の河野通保は、当時としては珍しく教育事件や論争についてさまざまなデータを用いて分析している。この河野の研究を用いながら当時の新聞報道における教師の事件についてみていきたい。

河野は、当時の教師の事件を目の当たりにして次のように言及している。「混濁せる物質萬能の現代に、精神的の光明を與へるものは何人なりや。現今の我国に於ては教育者のみがこの光榮ある重責に立つてゐるのである。(中略)今日の教育者に最も必要なるものは、自己の職業の權威を理解し大いにその重要な聖職を自重してほしい事である。近來の教育者がその榮達を計らんが爲めに醜惡なる手段を弄して、政治家の膝下に諛ひ不正の財を積むことに狂奔し、教室よりも酒席に入るを喜ぶ風習漸く顯著なのは誠に悲しむべき現象で、余輩は之を目にして教育者の自殺的行爲と考へる」(河野 1934: 220)と述べ、現前にある「聖職」としてまたは「現代社會の精神的指導者」としての教師の荒廢を嘆いている。そして、教育界の慣例化した昇進等の政治的な活動について批判している。

当時の教師の素行および風紀に関する処分については、表1のような文部省の通牒が基準

となっていた。

表 1 学校教師の素行および風紀に関する処分

学校教員ノ操行取締及風紀紊亂ノ處分方（明治四十年七月九日文部省通牒）

學校生徒ノ風紀振肅ニ關シテハ客年中訓令ノ次第モ有之夫々御取締相成居候儀ト存候處之カ教養ノ任ニ當ルヘキ教員ノ素行如何ハ兒童生徒ノ風紀ニ直接ノ影響アルハ言ヲ俟タザル處ニ有之候就テハ是等教育ノ素行ニ關シテハ自今一層御取締相成苟モ風紀ヲ紊ルカ如キ者ニ對シテハ嚴重ニ御處分相成候様致度此段及通牒候也

追テ小學教員中小學校令第四十八條及第四十九條ニ該當スル者ノ處分方法ニ關シテハ本文ノ旨趣ニ依リ自今一層嚴重ニ御措置相成度此段申添候也

小學校令第四十八條

市町村立小學校長及教員職務上ノ義務ニ違背シ若ハ職務ヲ怠リタルトキ又ハ職務ノ内外ヲ問ハス體面ヲ汚辱スルノ行爲アリタルトキハ府縣知事ニ於テ懲戒處分ヲ行フ其ノ處分ハ譴責減俸及免職トス私立小學校長及教員ニシテ前項ニ準スヘキ所爲アリタルトキハ府縣知事ハ其ノ業務ヲ停止ス

小學校令第四十九條

小學校教員免許狀ヲ有スル左ノ各號ノ一ニ該當シタルトキハ免許狀ハ其ノ効力ヲ失フ

一 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

二 破産ノ宣告ヲ受ケタルトキ

小學校教員免許狀ヲ有スル者不正ノ所爲其ノ他教員タルヘキ體面ヲ汚辱スルノ行爲アリテ其ノ情狀重シト認メタルトキハ文部大臣又ハ府縣知事ニ於テ其ノ免許狀ヲ褫奪ス

（注）河野通保，1934，『學校事件の教育的法律の實際研究下巻』より作成

このように教師の素行や風紀に関する処分が他の職種とは異なり発せられていることから、「聖職」という教師の社会的な立場や信用が罰則を伴って維持されていたことがわかる。続けて河野は、「教師は如何なる法的知識を備へて居れば、安心して日常の職務が執れるか。この事は比較的に社會の實情に疎く、犯罪の砲彈には極めて弱い教育者には非常に大切な研究事項である」（同書：223）として「教育者が犯し易き罪」をあげている。

その罪とは、「皇室に對する罪及び國體に關する罪（皇室罪）」「放火並に失火の罪（放火罪）」「秘密を侵す罪（秘密罪）」「文書偽造の罪（文書偽造罪）」「誣告の罪」「性に關する罪（性犯罪）」「瀆職の罪（収賄に關する法規）」「人の身體を殺傷暴行する罪（殺傷・暴行罪）」「逮捕監禁の罪」「名譽に對する罪」「財産に關する罪（窃盜及強盜、詐欺及恐喝、横領）」「納税違反の罪」をあげており、「凡そ罪を犯す場合に、天性的に惡性の者と、法に暗くて不知不識の間にこれを犯す場合とがあるが、教育者の場合には其の後の場合に屬するのが普通である。従つて教育者が、本章を充分に熟讀さるれば決して法を知らざるが故に、罪を犯すと云ふが如き事は絶對的に防止出來ると信ずる」（同書：305）という見解から教師の性善説を前提に理解していることがわかる。

ここで風紀に関する教師の報道をあげてみたい。「内職にもよりけり、これが教育者か、校長の出來心から暴露した情けない内職戦線」（『朝日新聞』1935. 2. 12 以後「朝日」と略す）では、東京市の小学校長が妾の名義でバーを経営していた事件が掲載されている。そのなかで

「現在市三十五區五百四十七校の小學校長、首席訓導千余名の内、純然たる無内職の者約六百五十名、内職を持つ者は三百五十名の多数だ（中略）問題のバー、カフェー、おでん屋、待合、マージャンクラブ等の經營者は五十名にもものぼつてゐる有様、現職の校長先生が淺草某映画館内に女給三十名も使ふカフェーや牛込の某待合の御主人であつたりする、これ等は殆ど恩給目當てに高利貸から融通した資本によつて始められ、その内職が又昇給榮進に役立つ大きな手段になり、學務委員や市會議員等が介在してゐる簡単に取締ることも出来ないのがその實情である（中略）教育者にあるまじき仕事をやつて居るものが多いといふ事は何といつても教育界の不幸事でなければならぬ」と掲載されている。

同様に「小学校教員の道德觀念」（朝日 1935. 2. 13）には、上記の東京市の現職小学校長の事件に対する社説が掲載されている。そのなかで「それはただ偶然な個人的な惡徳に止まらず、現在の教育界、少くとも東京市の小學教育社會の裏面を、さらけ出した一斷面でもあるのである。（中略）事情と環境が何であらうとも、それを許すべからざることであるから、嚴重に懲戒を加へ、取締をするのは當然であるが、それはただ罪を犯し刑に觸れた個人のみならず、こんなことを行つてやましく思はせないやうな帝都小學校教員社會の風潮、その道德觀を、もつと高め、もつと清めることを、第一としなければならぬのである」として、小学校教師の個人的な事件の背景には、教育界という全体的な問題があることを指摘している。

また教師の風紀に関して、「鐵則下へ男女教員“席を同うするな”同僚結婚は法度と通牒、頻出の風紀問題對策」（朝日 1936. 4. 15）の記事が掲載されている。その内容は、「最近小學校教員の風紀事件の頻發に鑑み、市の男女教員の生活がやや放從に流れてゐる傾向があるのでこれを憂慮した市教育局では對策を研究した結果、十四日の會議で成案を得た、即ち市教育局では、視學課で教員の素行上の黑表を作成して嚴重な監督をなすと共に風紀委員を設置して嚴罰主義をもつて臨み、學校長より報告のあつた場合は警視庁風紀係と打合せ會を開き更に常に連絡をとることに方針を決定した、また師範學校卒業生の學級主任と連絡を保ち、各區校長會に風紀問題對策を講ぜしめる外、各學校の風紀取締りの内規を作成せしめることになり、投書や密告をした者に對して嚴罰を加へることになつた、一方小學校長に對して十五日左のやうな注意を通牒することになつた（中略）その他男女教員の個人交際、宿泊旅行を禁じ、欠勤遅刻早退を嚴重に取締り、教職員の服裝の質素、禮儀作法を注意すること等が擧げられてゐる」と掲載され、小学校教師の私生活に対する注視と管理も教育行政の関心事となつていたようである。

（2）教師の事件報道

次に教師が主犯となつた事件についてみてみたい。教師が主犯となる事件の報道数は、250 件（続報および時評を含む）であつた。そのなかで、先述した河野の分類を用いて、続報がある事件や殺人等の凶惡事件、傷害や性犯罪に該当する事件を中心に考察する⁽⁷⁾。

①汚職の罪（収賄に関する法規）

続報として報道された事件として、昇進や採用をめぐる贈収賄事件は教師の事件報道でも多くを占めていた。そのなかで「帝都教育疑獄事件」（1933）を取りあげると、この事件は東京府市の小学校長の地位が売買され、その売買は慣行化していたことが露見した事件であった。また捜査が進むに連れて、教師たちが学用品の購入に際して接待等の不正が業者間で慣習化していたことが明らかとなり、検挙された校長は30名（その他、視学4名、元訓導1名、その他4名）にのぼった⁽⁸⁾。新聞記事の見出しには、「醜教員底なし更にけふ二名召喚」（『読売新聞』1933. 12. 1以後「読売」と略す）や「教育界・腐敗の根源を衡く、『金なければ校長になれず』轉免の裏に醜關係」（読売 1933. 12. 2）、「目を背けるこの醜、浅間しい幫間校長、瘦せ狼の様な視學—豫審決定書に現はれた教育疑獄の暗黒相」（読売 1934. 8. 11）など、「醜」という表現を用いることによって「聖職」である教師の起こした事件を批判している。この「帝都教育疑獄事件」に対して、ジャーナリストの長谷川如是閑は「教育界寒心」（読売 1934. 2. 4）と題して次のようにコメントしている。「最近の教育界の不祥事件は官公吏のそれに較べて一層世人に衝撃を與へてゐるが、之も決して教育界の特殊な現象ではなく、一般規律弛緩の現はれである。併し教育界には殊に人間教育の重任に當る道德的の、また信仰的の覺悟と力量を持つた人物が要求されるにもかかはらず、それが甚だ得られ難い事情がある」と述べ、その事情とは、急激な近代化による教育制度の普及と教師の急増であるとし、「斯うした事情は教育界が殊に世俗的の傾向から超越することを困難ならしめ、常に内部的に教育者に特に要求される厳格な人格的威厳を守つてゐるかどうかを世人から疑はれるやうになつた」と指摘している。

この「帝都教育疑獄事件」以降、新聞報道において教師の事件が起こる度に「またも教育界に」という内容が多く散見されるようになる。「どん底に突落され、惨めな保釋校長、暗い行手に救ひの手」（朝日 1934. 3. 21）では、「教育疑獄の泥沼の中に引ずりこまれた小學校長のうち十五名は去る十九日夜保釋を許されそれぞれ歸宅したが、その過半は家族が留守中に社會的な指弾と生活壓縮にせまられて轉居、みすばらしい小さい家で妻子に迎へられた」と報道されている。その後、教育疑獄事件を受けた社説「教育疑獄の教訓」（朝日 1934. 8. 11）では、いくつかの事件の要因をあげつつ、最後に「教育者一般が社會の中堅としてのほこりを失はず、惡風になづまず却て教育を通じてこれを矯正するの信念を堅持すべきであることはいふ迄もない」と締めくくっている。また投書「鉄箒」（朝日 1934. 9. 11）には、「師範と不祥事」と題して「首席訓導放火事件を読んで、近來の教育會不祥事連發にはすつかりうんざりさせられた。全體何が原因でこんな事ばかり起るのだらう。教育養成機關たる師範の制度に欠陥はないだらうか。（中略）國家が大事な金をかけて大事に教育した者が、教育者としてもつとも尊ぶべき『人格』の足りない人間だつたのだ」と連日の教育疑獄報道を含めて訓導の放火事件に対する意見が掲載されている。この投書をみても、これまで教師の事件報道に対しては一回き

りの報道が多かったが、教育疑獄事件以降はこの事件を引き合いに出したかたちで小学校教師の事件を批判する報道が見受けられる。

またこのような教師の汚職事件が明るみに出ること、新聞報道の教師に対する疑惑が高まる。「童心は蝕む『校長だつて…』と萬引をやめぬ少年－父親が警察へ涙の訴へ」(読売1933.12.5)では、連日の教育界を巡る贈収賄事件報道を受けて、子ども(12歳)が起した万引きの理由に教師も悪いことをしていると申し開きをしたことを父親が警察に訴えた事件が取りあげられている。

②財産に関する罪(窃盗及強盗、詐欺及び恐喝、横領)

表2 財産に関する罪

掲載日	見出し	年齢	性別	発生場所
昭和2年4月30日	水産校教師、學校の金で豪遊－二千餘圓をぬすみ出して、洲崎で捕はれ取調中	29	男	千葉県立水産学校
昭和4年2月5日	小學校教員が列車賊	不明	男	山口県徳山
昭和4年2月19日	校金費消に警察活動を始め－鈴木弘前高等學校長「悪い事をした」と生徒に陳謝	不明	男	青森県弘前市
昭和4年3月2日	日本刀を持って教諭の強盗－岡崎商業の大狼藉	32	男	愛知県岡崎市
昭和4年6月24日(夕刊)	繼母を迎へて家庭無情、訓導が自棄の盗み－妻子そつちのけに遊ぶくるひ、同僚の宅二軒を始め	30	男	東京麹町
昭和6年8月23日	横領小學校長	42	男	福井県丹羽郡三方村
昭和7年10月16日	模範小學校長、後援會費を遣込み－教員の積立金をも遊興に父兄から遂に告訴	43	男	東京中野区氷川町
昭和7年12月15日	帝都教育界の不祥事、お尋ね者の詐欺魔が假面の教員生活－市教育局長らも奉職に力添へ早くも感付いて逃亡	29	男	東京浅草区北富坂町
昭和8年1月5日(夕刊)	模範訓導が賊を働く－四十圓の自轉車を盗む	44	男	東京四日市市
昭和8年2月7日	又も帝都教育界の不祥事、模範小學校長が驚くべき横領偽造－吉野第一大鳥校校長、突如砂町署に召喚、嚴重取調べ	50	男	東京城東区
昭和8年10月15日(夕刊)	古切符で數年間、先生が只乗り－ポケットに十數枚の乗車券	30	男	東京東京驛
昭和8年11月30日	殆んど各區に巢喰ふ帝都教育界の醜狀－今後ぞくぞくと召喚	不明	男	東京
昭和9年8月4日(夕刊)	失踪の中學校長捕はる	56	男	茨城県水海道
昭和9年10月18日(夕刊)	松見順天中學校長、詐欺嫌疑で召喚－譲渡した學校を奪ふ	75	男	東京神田区
昭和10年2月20日	又も帝都教育界の不祥事、現職訓導と元女教員、驚くべし美人局！－體育ダンスの一人者、兩人とも警視廳に留置さる	40	男	東京世田谷区
昭和10年6月4日	同僚教員の醜事を種に人妻を恐喝－教壇を汚すギヤング	43	男	東京足立区千住大川町
昭和10年6月23日(夕刊)	無情の中學先生泣く十七娘－結婚約束も梨の礫	27	男	東京目黒区
昭和10年8月11日(夕刊)	夏期講習に上京の女教員が盗み－頻々と寄宿舎荒し	25	女	東京牛込區赤坂下町
昭和11年4月18日	學校騒動から不正暴露、卒業證書を月賦販賣－現職の三警官も登場す、東亞商業驚くべき醜狀	不明	男	東京中野区上高田町
昭和11年5月22日(夕刊)	商船學校の校長が洲崎署員へ贈賄の疑ひ－校金費消事件に絡む怪聞	不明	男	東京丸ノ内
昭和11年8月4日(夕刊)	視學校長ら四十五名、空前の横領暴露－静岡縣教育疑獄事件	不明	男	静岡県

戦前昭和期の教師観と学校問題（作田誠一郎）

昭和11年8月29日	松平伯邸へ怪漢－人騒がせな小教員	26	男	東京豊島区駒込
昭和11年11月15日 (夕刊)	府立五中校長を告訴－業務上の背任横領から	不明	男	東京小石川区
昭和12年1月21日	教壇に集る浄き金、十七萬圓を横領－昭和第一商業校長の罪證あがる	36	男	東京本郷区元町
昭和12年4月20日	高師空しき訓導、野宿して試験勉強－パンに飢ゑて學校荒しに轉落	26	男	東京中野区
昭和15年7月17日	教育界の不祥事、兩小教員の萬引横領發覺－憂ふべき素質の低下	不明	不明	東京神田区・足立区
昭和19年4月18日	學校設立認可に贈賄－父兄からは入學斡旋料	39・41・44・49・58	男	東京文部省

「繼母を迎へて家庭無情、訓導が自棄の盗み－妻子そつちのけに遊びくるひ同僚の宅二軒を始め」（読売 1929. 6. 24 夕刊）では、同居することになった繼母と折り合いが悪くなり、カフェー等の飲食店の女を相手に遊びまわり、金策に窮して置き引きや万引きを繰り返した事件である。また「模範訓導が賊を働く－四十圓の自轉車を盗む」（読売 1933. 1. 5 夕刊）では、小学校主任の訓導が自轉車を盗んだという内容であったが、見出しの「模範訓導」という表現や初犯の自轉車の窃盗という罪状だけで報道していることから、教師の犯罪が大きくあつかわれていることがわかる。

③人の身体を殺傷暴行する罪（殺傷・暴行罪）

表3 殺傷暴行の罪

掲載日	見出し	年齢	性別	発生場所
昭和3年3月18日	小學校教師、太刀を揮ふ－チフスで發狂して	36	男	福島県田村郡三春町
昭和3年4月21日	先生に突倒され前額に重傷－體格検査の際戯けまはつた栃木小學校の四年生が	不明	男	栃木県宇都宮市
昭和3年9月12日	恐れる老訓導、妻を殺す－虫入つた若き燕	56	男	神奈川県神田村
昭和5年2月17日	日本橋校の三訓導、電車内で泥酔狼藉－乗客を毆付け窓ガラス全部を破り、伊豆の旅先で大醜態	30・35・36	男	静岡県伊豆
昭和5年10月17日 (夕刊)	青竹でメツタ打ち、教諭、圓兒を撲殺す－埼玉學園の奇怪なりんチ發覺	38	男	埼玉県大宮市
昭和5年12月27日	保険金欲しさに校長、妻を毒殺す	42	男	高知県長岡郡本山町
昭和7年10月13日 (夕刊)	ギヤング訓導、女生徒を斬る	51	男	東京南多摩郡横山村
昭和7年11月4日	酒亂訓導大暴れ－カフェーで噛み付く投げる	22	男	東京京橋区銀座
昭和9年6月16日 (夕刊)	水神小學校の訓導、妻を刺し殺す－自分は其場で自殺を圖る、別れ話からの兇行？	29	男	茨城県北相馬郡布川
昭和10年1月31日	校長さん酒から亂暴	55	男	東京浅草区浅草公園
昭和10年6月23日	兒童の面前で訓導が毆合ひ－鉛筆逆手重傷負はす	28	男	東京向島区寺島
昭和10年9月7日	國民教育の教壇墮つ、空前・先生の爭議、校長を毆つた上、七人揃つて盟休－新學期早々の不祥事	30	男	東京城東区南砂町
昭和11年7月9日 (夕刊)	これが學校の常識か、重傷の兒童をあるかせて自宅へ－荒川教育界の不祥事	不明	不明	東京荒川区
昭和12年2月20日 (夕刊)	また池袋第六校に不祥事件、訓導、人妻に暴行！	34	男	東京板橋区板橋
昭和13年4月20日	訓導同士が亂闘	38	男	東京城東区大島町

昭和 13 年 6 月 21 日 (夕刊)	小學校長暴ばるーおでん屋で出資金のもつれから	38	男	東京杉並区高円寺
昭和 14 年 6 月 18 日 (夕刊)	夫人怪死事件、校長を追及ー縣學務部緊張	48	男	埼玉県入間郡名栗村
昭和 15 年 4 月 25 日	訓への鞭縛る一度を過ぎた懲しめに児童傷つき、傷害罪で訓導送局	34	男	東京下谷区

河野は、教師の殺傷事件について「他の職業等に比べて暴行殺傷等の事件は教育界には比較的少ないのは事実である。然し教育者を特別なる倫理階級と目してある世間では僅かな事件でも『教師ともあろう者が』といふ考へから新聞雑誌等に兎角教育界のこの種の事件を報道しやうとする」(前掲書: 286) と述べており、当時の教師の暴行や殺傷事件の実態と報道が乖離していることを指摘している。本稿で取りあげた教師の殺傷事件報道についてもその数は少なく、多くは学校外の私生活における事件であった。具体的な事件をみみると、「ギャング訓導、女生徒を斬る」(読売 1932. 10. 13 夕刊) では、51 歳の尋常小学校男性教諭が、担任である 5 年生の生徒 (11 歳) ほか 5 名が言うことを聞かないという理由で、女生徒 (11 歳) をストーブ様の鉄槌で殴打し、さらに安全カミソリで生徒の手の指、足等 3 ヶ所を斬りつけた。さらに、男子生徒 (12 歳) の手足 2 ヶ所を斬り、「鮮血を出して他生徒の見せしめにした」と掲載されている。この報道においても、事件の見出しに「ギャング」という言葉が用いられていることからわかるように、斬りつけ負傷させることを「ギャング」に置き換えて、「ギャング訓導」というインパクトを重視した報道であることがわかる。

また、「訓への鞭縛る一度を過ぎた懲しめに児童傷つき傷害罪で訓導送局」(読売 1940. 4. 25) では、5 年生の受持ち訓導 (34 歳) が 5 年生 (11 歳) に対して「(掃除) 當番に不忠實をなじつて顔面を殴打したうへさらに實之留さんが持つてゐた竹刀をとつて背から腰のあたりをさんざんに殴打全治二週間の傷を負はせ」と報じられている。少年の父親が校長に電話して後日少年宅を校長が訪れたが、訓導の行為を肯定する見解を示したため、訓導を相手取って傷害罪の告訴をおこなったと報じている。

当時の児童生徒に対する教師の懲戒権については、小学校令第 45 条に「小學校長及教師ハ教育上必要ト認メタルトキハ児童ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得」と規定され、刑法第 35 条「法令又ハ正當ノ業務ニ因リ爲シタル行為ハコレヲ罰セス」と規定されていることを根拠として教育活動をおこなっていた。ただし、当時の小学校令においても「懲戒ヲ加フルコトヲ得。但シ體罰ヲ加フルコトヲ得ス」(第 45 条) として体罰は禁止されていた。

河野も教師の体罰を介した指導について、「體罰や其他の威嚇手段を取つて始めて訓育的效果を達する教師は、穩健な訓戒手段と周到な豫防手段を取つて事なく治める教師に比して、それだけ教育的に低價値の者とも言ひ得る」(河野 1933 : 232) と批判しているが、一方で「教師が生徒の非行を訓戒するのは職務上當然のことであつて問題になる筈はないが、若い教師が熱心と感情の激化にまかせ體罰を科したり、生徒の身體に觸れたりすると事件が大きくなり勝

である。父兄の理解があればよいが、不幸にして教師と父兄の間に誤解や意地が入ると豫想外の大問題と発展するのが常である」（前掲書：236）として、体罰の禁止に関する実際的な運用については両面があり、保護者との関係が重要であると述べている。この意見から戦前昭和期においても、教師の生徒指導が行き過ぎることへの懸念と保護者の理解が生徒指導において重要である点など、今日の生徒指導に共通する内容が認められる。

④性に関する罪（性犯罪）

表 4 性に関する罪

掲載日	見出し	年齢	性別	発生場所
昭和 2 年 8 月 31 日	教え子を蹂躪した上、金を奪ふ小学教員－少女が縣刑事課に就職の後も執拗に付纏つた爲遂に發覺、免職處分に附さる	25	男	神奈川県横浜市南太田町
昭和 3 年 2 月 18 日	仰高小学校の訓導、女生十數名を弄ぶ－女學校受験生の準備教育の後で膳寫室で裸體にし變態性慾的に教育界を驚倒した大問題	32	男	東京巢鴨町
昭和 3 年 4 月 6 日	女學生十數名を校長が弄ぶ－名古屋高女の醜狀を縣當局が秘密に調査	不明	男	名古屋市東区
昭和 4 年 5 月 14 日 (夕刊)	御眞影室に連行し校長小學生を弄ぶ－府下新島小学校の怪事	40	男	東京新島
昭和 5 年 4 月 5 日	二少女連出しの教員姿を侮ます－新宿ホテルに滞在中、手配に驚いて外出したまま	28	男	東京新宿
昭和 5 年 9 月 17 日	教へ子の少年を唆かし、女教員のかけ落ち－自宅教授から關係、遂に妊娠して心中か、十日餘も消息を斷つ	24	女	神奈川県横浜市中区
昭和 10 年 2 月 11 日	現職の小學校長が教へ子に桃色觸手－待合誘惑に義憤した運轉手、少女を救つて警察へ	40	男	東京巢鴨町

昭和 2 年に報道された尋常高等学校の男性訓導（25 歳）の事件では、当時の女子生徒（16 歳）に対して、理科室に施錠して暴行し脅迫して小遣いを取りあげ、その後も十数回の暴行と脅迫をおこなったという。さらに同女が退学して横浜の県警警察部刑事課の給仕として就職した後も通勤中に執拗に付きまとい、空家に拉致して暴行を加え、同女の財布を強奪したことから発覺した事件である。この事件は、性犯罪としても強盗や恐喝としても該当する事件であるが、長期間に渡る犯行である点からも教師の権力と泣き寝入りせざるを得なかった女子生徒の関係が認められる。

また、「仰高小学校の訓導、女生十數名を弄ぶ－女學校受験生の準備教育の後で膳寫室で裸體にし變態性慾的に教育界を驚倒した大問題」（読売 1928. 2. 18）では、尋常小学校の主席訓導（32 歳）が、担当していた 6 年の女子生徒たちを裸にして、その中の數名を膳写版室に連れ込み腰部を弄んでいたという内容である。その報道のなかで、校長は次のようにコメントしている。「學校が調べたところでは女生徒の身體検査の度を過ぎ着物を脱がした程度のものが色々世間に誤り傳へられたのだらうと思ひます。しかしさういふことが世間に傳はつた以上は本人の責任を感じて職を退いてもらつた次第であります」と述べている。この校長のコメントからも、世間体と学校の責任を回避する校長の姿勢が窺える。

河野は、教師の性犯罪について「唯一一般人が一般社会で行ふ場合と比較して学校教師が学校に於てかかる醜劣なる性犯罪を行つた時には、司法官は必ずや刑の最重處罰で行ふ事は明瞭である。往々教師が女生徒に暴行する事件が発生するのは誠に嘆かましい事であつて、教師は生徒を吾が子の如く考へてこれを愛し、又威厳を以つてこれを導くべき筈であるが、その我が子に等しい神の如き子弟と醜關係を結ぶに至つては論外の沙汰である」(河野 1934:235)と批判している。この批判から聖職者たる教師が最もタブー視される児童生徒への性犯罪をおこなった場合、その処罰は一般人よりも重いものになるという教師観が読みとれる。教師の権威が衰退しつつあった時代において、逸脱行動に際しては依然として権威を帯びた聖職としての教師像が事件報道から認められる。

(3) 元教師の事件報道

これまで現職の教師を対象として事件報道を取りあげてきたが、新聞報道では「元訓導」や「元校長」など、退職した教師の事件についても掲載されている。教師は「聖職」や「人格者」というイメージが強いために、その職を退いた後まで事件報道において「元教師」として報道されている。

表5 元教師の事件

掲載日	見出し
昭和2年1月7日	弄ばれて自棄の末、萬引した元女教員－三越の新宿分店で
昭和2年8月19日	元訓導がやけでスリ生活－神田橋上の市電で遂に錦町署員に逮捕
昭和2年11月13日	愛する三人、三疊で心中－小学校の元女教師と資産家の中学生と娘
昭和2年11月28日	えな祭りだと元教員騙る
昭和3年2月28日	生徒を絞り上げる女学校を近く征伐－規定の不備から續出、入学期を控へて文部省の調べ
昭和3年4月2日(夕刊)	東電技師の妻が美装したく萬引－父は小学校長祖父は議員、自分も元訓導の身で
昭和5年5月9日	元高女教諭が学校を荒し廻る－校長の偽名刺で書籍を詐取、校金を持逃げした男
昭和6年6月29日	元小学校教員が植木畑で心中
昭和7年4月9日(夕刊)	不倫の戀に狂、元訓導ビストル心中
昭和7年8月29日	元教員の放火－あらぬ噂を恨みに思ひ
昭和7年9月16日(夕刊)	元小教員で軍曹、私刑被害者の身許判る
昭和7年12月6日	元女教諭が愛から悪へ
昭和8年3月15日	元小学校長ら婦人子供博を利用－一万五千餘圓を騙る
昭和8年6月23日	小原前校長、再び召喚
昭和8年6月28日	元臨川(澁谷)小学校長、小林職氏縊死す－教育疑獄に連坐して保釋中に罪過を自裁
昭和8年12月10日	贈賄元訓導を槍玉に前視學とともに拘引－椅子賣買の裏面を衡く
昭和9年1月7日	實母殺しの元教諭、刑務所で縊死す－公判の前に悔悟の清算? 獵奇の謎秘めたまま
昭和9年1月12日	元盲啞學校長、うらぶられて詐欺－満州國の權利を種に騙る
昭和9年3月4日(夕刊)	訓導を讀者に桃色研究會－販賣係りの元教員捕はる
昭和9年6月26日	死場所探し徘徊の元教諭
昭和9年8月17日	地下に暗躍する赤い元女教諭－母の死さへ知らず
昭和9年8月21日	国士館の前校長－柴田氏召喚さる、七万圓の横領嫌疑

戦前昭和期の教師観と学校問題（作田誠一郎）

昭和9年10月24日	元首席訓導の轉落、詐欺罪で捕はる－知事の印や恩給證書を偽造
昭和9年11月20日	元訓導の夫婦が失業者泣かせ共謀で五千圓騙る
昭和9年12月12日（夕刊）	『無職です』も淋しく裁かれる元校長－帝都教育疑獄の公判
昭和10年2月22日（夕刊）	教育疑獄にも革手錠の登場－元校長が法廷で陳述
昭和10年4月19日	運轉手泣かせの呻き聲も使分け“轢かれ詐欺”小學校長のなれの果、狂言ばれて留置場に入院
昭和10年5月20日	女子醫專生を絞め、元教諭、死を圖る－教へ子との戀の末路
昭和11年2月7日	酒に崩れた元校長－あくどい詐欺
昭和11年5月28日（夕刊）	元縣視學萬引
昭和11年7月19日	収賄の元兩視學、實刑は取消し－教育疑獄、寛大な控訴判決
昭和12年6月19日	元訓導本屋荒し
昭和12年7月4日（夕刊）	元校長四氏に上告棄却－帝都教育疑獄
昭和12年12月10日（夕刊）	神港商業元校長自殺す－酒に身を崩し大島で
昭和13年3月12日	ニセ五十錢犯人－訓導もしたインテリ崩れ御用
昭和13年6月2日（夕刊）	死に結ぶ訓導の戀－妻子捨てて十和田湖へ
昭和13年6月4日（夕刊）	妻に逃げられた自棄の元訓導－書籍専門に萬引修行
昭和15年12月8日	元教員の靴泥
昭和16年12月4日（夕刊）	養女を絞めて－元訓導自殺

表5をみても現職の教師と同様に事件報道の見出しに「元訓導」や「元校長」などと掲載され、読者の注目を集めるような報道姿勢が認められる。また事件報道をみていくと、その事件も窃盗や詐欺など、元教師でない場合には報道されなかったであろう「ニュース価値」の低い内容も含まれている⁽⁹⁾。

（4）教師の自殺

今日の教師においても精神的な疾患による休職や自殺などが問題視されている。ここでは、教師の自殺という逸脱現象に注目してみたい。

表6 教師の自殺

掲載日	見出し
昭和3年4月23日	學校戀しく田舎教師の自殺－戀ゆえに追はれた元の小學校洗面所で
昭和4年12月13日	訓導と女給ガス情死
昭和5年8月1日	校金費消の校長、山林中で縊死す
昭和7年3月31日	教へ子の不成績を悲觀自殺
昭和7年4月27日（夕刊）	先生の割腹
昭和7年12月26日	訓導失戀自殺
昭和8年3月29日（夕刊）	『押し借り』の訓導、前田侯邸で服毒す－兒童の家庭で斷られ・その足で
昭和8年6月28日	澁谷校の訓導服毒－神經衰弱から
昭和8年6月30日	訓導の心中
昭和9年2月14日	家出の三浦校長、縊死體で發見さる
昭和9年2月28日（夕刊）	授業中、教壇の上で訓導が剃刀自殺（未遂）－神田佐久間校の薄葉氏
昭和9年7月4日（夕刊）	保釋中の前校長またも自殺す－元第三瑞光の福田氏
昭和10年5月29日	女教員と驛手－霧ヶ峰心中

昭和 10 年 12 月 15 日	教壇に結んだ三角愛、訓導・戀の“青酸”自殺－女教員“死の同伴”行
昭和 11 年 9 月 21 日	秋簾條・女訓導の自殺－新婚の圓かに樂しき夢僅か、恐るべき病魔に奪はれし夫を追つて
昭和 9 年 9 月 22 日 (夕刊)	青春も戀も寂し一家の犠牲、女教諭の服毒－空しく疲れ果てて
昭和 12 年 2 月 28 日	校長溺死

教師の自殺についてその原因はさまざまである。しかし、当時も自殺の増加（首都圏）について問題視されていたなかで、「教師」が見出しに掲載されていることから社会的に注目が高かったことがわかる。また心中や指導の失敗、精神的疾患など、当時の教師が抱えていた問題が自殺という結果から知ることできる。

5. 総 括

これまでの教師にかかわる事件報道について整理したい。教師の事件について、特にその教師が教育的立場と相反する犯罪をおこなった場合は、社会の注目とともに厳しい批判に曝されることがこれまでの新聞報道からも明らかとなった。また事件の多くは、男性教師によっておこなわれていることも特徴としてあげられる。河野は、教師の事件報道について「殊に社会は未だに教師を一種特別の道德階級と概信してゐるから、若し教育界に事件が生ずると新聞雑誌等しく之に興味の筆を集中し、大いに論難攻撃する習慣が出来て來た。市井にはザラにある普通の犯罪でもこれを教師が犯した場合や、学校で発生した場合等には、特別の注目が加へられるのである」（前掲書：222）と指摘している。「聖職」や「道德階級」としての教師に対する紙面における攻撃的な報道が本考察でも明らかになった。

また教師の事件報道における特徴として、児童生徒に関わる事件の多くは校長のコメントが掲載されていることがあげられる。特に報道が大きく取りあげられた事件では、校長以外にも保護者や関係者のコメントも掲載され、学校や監督責任者である校長が教師に対する弁解も報道されている。例えば、先述した「訓への鞭撻る一度を過ぎた懲しめに児童傷つき傷害罪で訓導送局」（読売 1940. 4. 25）では、「亂暴極る話－父親の憤慨」（父親のコメント）や「結果は重々遺憾、だが教師としての良心は（中略）立場を語る柴訓導」（訓導のコメント）、「安西校長の談」（校長のコメント）や「鈴木上野署長語る」（検挙した警察署長のコメント）などが掲載されている。このような報道姿勢は、事件に対する責任の所在を新聞メディアが構成している感が否めない。つまり、教師に対する事件報道からみた言説は、一般の市民以上に「聖職」や「指導者」としてのイメージが付与され、その言動が子どもに影響を与えると思われるがゆえに保護者をはじめとした社会の注目と批判に曝されることになるのではないだろうか。また教育現場では、聖職に帯びる権威の衰退を憂慮し、ひとたび事件が起これば聖職者としての教師や聖域としての学校が非難されるという構図は、今日の学校問題や教師の問題にも通底するのではないだろうか。

その後、戦時下に入ってくると教師の事件報道は減少していく。その理由のひとつとして、1940（昭和15）年には内閣情報局が設置され、言論報道機関・出版物・映画・演劇などに対する検閲の強化のため、言論の自由は大幅に制約されたことがあげられる。これは、先述した「小国民」である児童生徒を錬成する「国家の教師」としての社会的地位が強く政府や国民に意識され、天皇の名のもとに児童生徒を指導する精神主義と体罰主義をもった教師像が構築されつつあったと考えられる。また当時の教師観を知る手がかりとして代用教員の報道に注目する必要がある。投書欄をみても「訓導飢餓」（朝日1938. 4. 12）や「時代の風に煽られて先生の大量転職、大困りの地方小学校」（朝日1939. 5. 18）「減らぬ先生の転職、懲戒処分も覚悟で赴任の有様、文部省も対策に困る」（朝日1940. 1. 9）など、戦争に関連した産業界への転身や大陸に渡る者、そして夫の転任に際して退職する女性教師等の小学校教師の離職問題が多く報道されている。この状況を受けて、「低下した先生の質、教育改革も悩む、増加一方の代用教員」（朝日1940. 3. 19）など、戦局が激しさを増してくると教員不足は深刻化し、その対応として代用教員が増加した。

その代用教員について新聞投書欄では、「代用教員」（朝日1940. 3. 12）として「最近時局の影響で『代用品』なる語が一層の流行語のやうになつて來てゐるため、代用教員に教へられる児童は、スフ（捨つ）先生と綽名する學校があるさうだ。これは教育上、訓練上由々しい問題で、子弟の尊信を傷つくることが甚大であるやうに懸念される。それじゃなくてさへ、『おれの方の受持の先生は、一人前の先生ではないんだぞ』と語り合つた學校もあつて、そこの代用教員は、泣いて説得したと云ふことも聞いてゐる」と掲載されている。代用教員に対する社会や児童の教師観が「低下」や「代用」という言葉から読み取れる⁽¹⁰⁾。一方では、小針が「学校の教師もまた軍国主義・総力戦体制下の『国家の教師』として再編されることになった。国民学校の教師の役割は少国民を錬成することにあつて、ファナティック（狂信的）ともいふべき、精神主義と体罰主義をもって、子どもたちの上に君臨した」（前掲書：135）と指摘するような側面も戦局が厳しさを増すにつれて制度的な教師観として打ち出される期間であった。

最後に戦前昭和期の小学校教師の事件報道において教師の生い立ちから犯行に至るまでの履歴が掲載されていることも特徴としてあげられる。この個人の履歴掲載に関しては、社会一般の教師像とともに個人としての教師像が表現されており、社会的地位としての教師とともに一個人としての教師という重層的な教師観が事件報道から読み取れる。これと同様に、代用教員（訓導とは異なる教師観）の増加と教育界の腐敗問題（小学校教師を代表する校長の信用失墜問題）、戦時期の「国家の教師」は、制度的な側面から小学校教師の教師観をさらに重層化させたのではないだろうか。

6. おわりに

本論ではあまり言及しなかったが、教員文化についても考えなければならない。永井(1981)は、「教員が互いに他者に対して同調を求める一定の様式化された行動のパターンがあり、それが教員の現実の行動にきわめて大きな影響を与え、いわゆる教員タイプとか教員らしさの形成に資する結果となっている。こうした様式化された行動のパターンこそが(中略)教員文化というべきものである」(永井 1981: 578)と指摘している。教職だけに限らず、各職業における職場集団にも共通することだが、特に学校社会という閉鎖性の高い社会では、同調的な傾向も高まり、教師の言動や児童生徒に対する指導も様式化された行動パターンが促進される傾向にある。このような学校社会における教師および児童生徒の逸脱行動は、同調的な教員文化のもとで隠ぺいか排除かという両極端な対応に至ることが本論においても明らかになった⁽¹¹⁾。

またデュルケムの教師論を考察した原田(1978)は、国家によって付与された教師の権威と権限に注目し、教室という空間のなかで子どもたちが教師の力に抵抗できない状況を前提として、教師自身による自己規制が教師の恣意的な権限の濫用を防ぎうることをデュルケムの教師像として明らかにした。デュルケム([1925] 2010)が読み取った学校社会の状況は、時代や文化が異なるが、教育科学としての方法論から指摘する近代社会の教師のあり方は現代社会の日本の教師にも通じるところがある。デュルケムが指摘する道徳的実在としての聖職者と同様の教師像が、最も道徳とは対極にある逸脱行動によって崩壊するとき、または国家を後ろ盾とする権威と権限が効力を失うとき、人間としての教師の弱さとともに近代的な学校システムの姿が鮮明に映し出されるのではないだろうか。

学校や教師は、近代的な学校制度が成立して以降、子どもたちにとって生活の一部を形成し、かつ大きな影響を与えてきたことは周知の通りである。そして、近代的な教育システムがつくり支えてきた教師観が、逸脱行動を中心とする事件報道によって揺らぐことは、学校社会や教師という存在を改めて見つめ直す契機ともいえる。このような逸脱領域から教師観を考察するアプローチは、戦前戦後の教師観や学校観を考察するうえでも有益な視点を提示するものと思われる。

〔注〕

- (1) 教員政策から教職観を分析した熊谷は、戦前期の考察において「天(聖)職観が具体的にそれだけで教員政策として打ち出され、制度化されたことはなかったが、教員政策のなかの教師の道徳的規範、教職倫理に関する部分において潜在的に強大な影響力をもった」(熊谷 1973: 34)と指摘している。
- (2) 戦前期を含めた日本の学校社会へのアプローチについて、木村は「戦後の学校は戦前、戦中の反省

の上に成立したとされているが、戦前に形成されていた日本の学校の土台ともいえる基礎構造は、戦後社会にも連続して貫かれている。その意味で学校の戦後史は、戦前の『日本の学校』の形成期が出发点となっている」（木村 2015 : 20）と述べており、戦前を含めた「近代」化に注目している。

- (3) 教師観とは、『新教育社会学辞典』によると「教師という職業をどのようにみるかという観念・態度・評価をいう」（稲垣 1986 : 284）とある。また熊谷は教職観について「公教育の体制を維持する不可欠の要件として枢要な役割をはたす教師についての観念形態である」（熊谷 1973 : 31）と定義している。さらにその特徴として、「未成熟者の教授指導にあたる特殊な職業、人格に対する観念形態であるところから、一般的に認識的な側面にくらべて理想的、情緒的側面が強調されがちである」（同書 : 284）と指摘している。
- (4) 玉井（1960）は、明治期以降の政府の教師に対する対策として「教師の養成問題」「教師の資格問題」「教師の待遇問題」「教師の身分を拘束する問題」の4つを挙げている。
- (5) 本研究の対象とした『読売新聞』は、1874（明治7）年に創刊し、全国紙として現在に至っている。大正期には他の全国紙と同様に夕刊の発行が開始されることで購読者への情報量も増加し、本研究の対象である学校事件の報道数も増加した。
- (6) 「ヨミダス歴史館」において、「学校」「教師」「学生」「生徒」等のキーワード検索をおこなったが、その後、対象期間のすべての記事に目を通して収集の漏れがないように留意した。キーワード検索により利便性は高まったが、手引き作業をおこなうことでキーワードでは抜け落ちてしまう記事も多く存在することが再確認できた。
- (7) 本論で取りあげた教師の罪名については、新聞記事の内容から判断して分類した。したがって、その罪名については、続報がない事件が多数あるためその後に起訴されたであろう罪名ではない。
- (8) 「帝国教育疑獄」に関しては、河野が詳細に分析している。「醜校長の数はまだまだこれに止まらず今日までの取調べによつて検事局及び警視廳がブラックリストにのせてゐる醜校長は實に百名内外に上るといはれてゐる、しかも當局の捜査は初等教育界の癌をなす醜視學連から視學のイス賣買問題これをあやつる名譽職更に中等學校の校長イス賣買問題にまでのびる形勢にあり、教育疑獄の檢舉は本年夏近くまで續くかも知れないと觀測されてゐる」（前掲書 : 283）とあり、教育界において大きな事件であったことがわかる。
- (9) 新聞報道も「社会的使命」として真実を伝えるという側面と購買という経営的側面も併存する。つまり、購読者のニーズにそつた事件や話題を取捨選択して提供することで「ニュース価値」を高め、村上（1999）が指摘するような新たな社会のモラル・オーダーの再生産をおこなうこともある。この「ニュース価値」について矢島（1996）が指摘するように「犯罪事実」から「報道事実」へとアウトプットする機能である「ブラックボックス」（「ニュース価値」という判断基準によって取捨選択され、アレンジされる）の存在も新聞報道の分析において常に意識しなければならない視点である。
- (10) 当時の不足する教員養成については、水谷が三重県の事例を用いて「教員養成講習所の講習期間は、わずかに六ヶ月という短期間であつたが、与えられた資格は『国民学校初等科訓導』であり、師範学校卒業生に匹敵する資格を取得し、学校における教育実践の中学として活動することとなつた」（水谷 1981 : 510）と述べているように、訓導においても代用教員と同様に養成は急務であつた。
- (11) これまでの教員文化の史的な先行研究を通観して、木村は「教員文化についての史的研究では、実のところ、戦前・戦後という政治史的な時期区分は意味をなさず、またその区分が却って明らかにされるべき課題の究明を妨げる条件になってしまっていたのである」（木村 2003 : 416）と指摘している。本論における逸脱領域からみた教師観においても、今日に通底する教師へのまなざしや社会的反作用に対する教師自身の対応の一端が明らかとなった。

〔参考・引用文献〕

- 石戸谷哲夫, 1967, 『日本教師史研究』講談社
石戸谷哲夫・門脇厚司編, 1981, 『日本教員社会史研究』亜紀書房
市川源三・落合寅平・津田信良・佐々木秀一監修, 1936, 『学校事故実話・実例・対策集』学校事故防止研究会
入澤宗壽・山崎博, 1933, 『生活指導小學校行事の研究』教育實際社
大塚好, 1939, 『工場生活と少年の教育』錦正社
小川正行, 1938, 『現下の教育問題』目黒書店
片桐芳雄・木村元編著, 2008, 『教育から見る日本の社会と歴史』八千代出版
唐澤富三郎, 1955, 『教師の歴史－教師の生活と倫理』創文社
木村元, 2003, 「教員文化の形成と教育愛」久富善之編『教員文化の日本の特性－歴史, 実践, 実態の探究を通じてその変化と今日的課題をさぐる』多賀出版
木村元, 2015, 『学校の戦後史』岩波書店
熊谷一乗, 1973, 「教員政策とその教師観」『教育社会学研究』第 28 集
河野通保, 1933, 『学校事件の教育的・法律的・實際的研究 (上)』文化書房
河野通保, 1934, 『学校事件の教育的・法律的・實際的研究 (下)』文化書房
小針誠, 2007, 『教育と子どもの社会史』梓出版社
少年保護協会, 1937, 『少年保護読本』少年保護協会
Durkheim, Émile, 1925, *L' éducation morale*. Nouvelle éd., PUF, (=2010, 麻生誠・山村健児『道徳教育論』講談社)
田中勝文, 1979, 「戦時期の教育と国民学校－児童および教職員」仲新監修『学校の歴史第 2 巻小学校の歴史』第一法規出版
玉井肇, 1960, 『学校と教師の歴史』至誠堂
仲新・伊藤敏行編, 1984, 『日本近代教育小史』福村出版
永井聖二, 1981, 「現代の教員社会と教員文化」石戸谷哲夫・門脇厚司編『日本教員社会史研究』亜紀書房
日本教育社会学会編, 1986, 『新教育社会学辞典』東洋館出版社
原田彰, 1978, 「デュルケムの教師論－その教育理論の再検討－」『教育社会学研究』第 33 集
広田照幸, 1990, 「教育社会学における歴史的・社会史的研究の反省と展望」『教育社会研究』第 47 集
広田照幸, 2001, 『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会
水谷洋, 1981, 「決戦期の教師像」石戸谷哲夫・門脇厚司編『日本教員社会史研究』亜紀書房
村上直之, 1999, 「マス・メディアと逸脱」宝月誠編『講座社会学 10 逸脱』東京大学出版会
文部省教育調査部編, 1938, 『師範教育関係法令の沿革』文部省
矢島正見, 1996, 『少年非行文化論』学文社
柳治男, 2005, 『〈学級〉の歴史学－自明視された空間を疑う』講談社

〔付記〕

本文中には差別的な表現・表記があるが, 原文の歴史性を考慮してそのままとした。また, 当時の新聞記事には, 改行や句読点がないことが多く本稿では適宜補っている。

(さくた せいいちろう 現代社会学科)

2018 年 10 月 31 日受理